

東方西口遺跡発掘調査 現地説明会

令和2年（2020年）1月10日（金）

越谷市教育委員会 生涯学習課

【調査地】埼玉県越谷市大成町二丁目地内

【調査期間】令和元年9月30日から1月31日まで（予定）

【調査面積】約1,500㎡

【調査概要】

東方西口遺跡は元荒川の自然堤防上に立地する、室町時代から江戸時代にかけての遺跡です。

これまで、この地に遺跡が存在することは知られていませんでしたが、平成29年に新大相模保育所建設に先立ち、遺跡の有無を確認する試掘調査を行ったところ、井戸跡や板碑等が発見され、遺跡の存在が明らかとなりました。

越谷市教育委員会では保育所建設工事の進捗に合わせ、平成29年度と令和元年度に発掘調査を実施しています。

調査により、遺構としては井戸跡や溝が発見され、出土品では土器、陶磁器、板碑、漆器椀、小刀などが発見されました。また、地形が変化する地点（自然堤防の縁）が確認され、地形を考慮した土地利用を行っていたことが分かりました。

調査区は旧東方村下組の名主を勤めた中村氏の所有地であったと考えられ、中村家との関係性が推測されます。



国土地理院ウェブサイトの
空中写真（1949.01.10撮影画像）
及び土地条件図を加筆修正

調査地点

●旧東方村下組中村家とは
東方村は上組と下組に分かれ、それぞれの組に名主がいました。今回は誤解が無いように「下組」中村家と記載します。

なお、「上組」中村家とは敷地が隣同士の関係にあり、上組中村家を「西の中村家」、下組中村家を「東の中村家」と称する場合があります。両家は少なくとも江戸後期には親戚関係となっていますが、いわゆる本家と分家の関係ではないと伝えられています。

下組中村家は平姓を受け継ぎ、文明年間（1469～1487年）に太田道灌に仕え、大相模郷の郷土となっています。

その後、農民となって代々「孫左衛門」や「庄右衛門」という通称を名乗り名主を勤めてきました。

●地形の特徴

調査区の地盤となる土は粘土質であり、少し掘削すると、数十分後には水がしみ出してきます。南側に向かって地形が低くなっており、低い南側は特に水が多いです。水田として利用されたと考えられます。

一方で、北側に向かうにつれて急激に土地が安定すると考えられ、北側は地盤が粘土ではなく、シルト質（いわゆる「土」）に変化すると推定されます。家屋等をつくるには適しているといえるでしょう。

●井戸

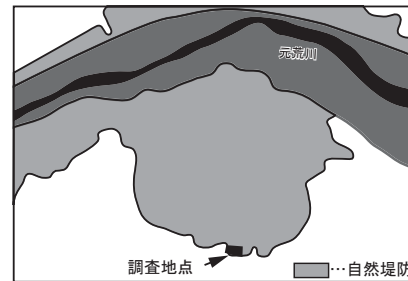
調査区の北側に集中して構築されています。2個並んでいる場合がありますが、時期差があると考えられます。井戸からはほとんど何も出土しない場合もありますが、板碑や香炉、小刀、土器片などが出土する場合があります。

板碑は井戸がほぼ埋まった段階で埋められており、板碑の供養か、井戸の供養を意図したのでしょうか。

●溝

調査区の中央から南側にかけて、3条が東西方向に並行して構築されています。自然堤防の外側同士をつなげているのでしょうか。おおむね今から200年までの江戸時代後期の溝であると考えられます。

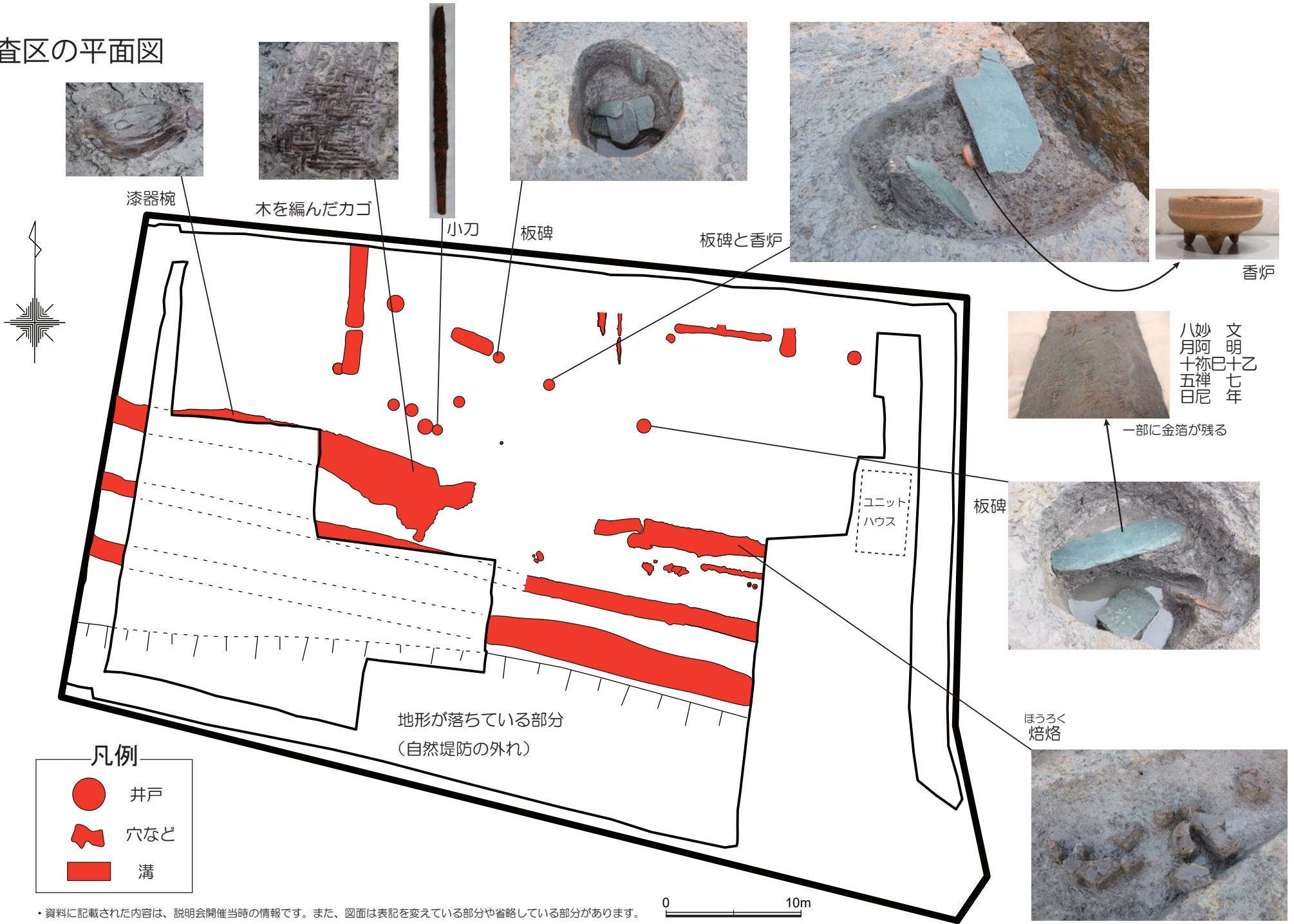
●自然堤防と調査区の位置関係



左図は元荒川の自然堤防を表した図です。航空写真と見比べると、1949年（昭和24年）には自然堤防上に家屋が集中していることが分かります。遺跡の時代にもこのような土地利用がおおむねされていたと考えられます。

調査は越谷市シルバー人材センター会員、越谷市文化財ボランティア、中学生社会体験チャレンジに参加の中学生に尽力いただきました。皆さま、ありがとうございました。

調査区の平面図



・資料に記載された内容は、説明会開催当時の情報です。また、図面は表記を変えている部分や省略している部分があります。また、その後の発掘調査や整理作業により見解が変更になる場合がありますので、ご承知おきください。